

Title	岡先生のこと
Author(s)	和布浦, 洲英
Citation	西洋古典論集 (2001), 別冊: 92-95
Issue Date	2001-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/68712
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

岡 先 生 の こ と

和 布 浦 洲 英

私が岡先生とはじめてお会いしたのは、2回生のときでした。これはのちに先生自身のお話からそうであろうと私が推測したこともあります、しかし事実そうであっただろうと思います。

1回生の秋、昭和36年のことですが、当時私たちのクラス担任をなさっていた女性のドイツ語の先生が結婚を機に退職されると聞きました。このころ岡先生はドイツのマインツ大学に国費留学されていました。これも当時大学に奉職する道は岡先生をしても厳しく、「まだ就職先が決まらないので、ドイツに留学してはどうですか」と指導教授から言葉を受けて留学されていたそうです。同志社大学法学部にドイツ語の先生が急遽必要となり、留学中の岡先生がドイツから呼び戻されることとなりました。この間の事情に付いては松本仁助先生が詳細をご存知のはずです。こうして岡先生は昭和37年4月から同志社大学法学部にドイツ語担当助教授として奉職されました。（先生は「法学部」に在籍していることについては納得がいかなかったご様子で、しばしば「法学部」に対して「文学部」へ移籍を要求されていたそうです）。

さて、昭和37年度の一般教養選択科目の中に「西洋古典文学」という講義が開講されていました。入学時からギリシャ文学やギリシャ哲学に何となく興味をもち、二、三の本を読んでいた私は2年時の履修科目として登録し、受講することにしました。担当はもちろん岡先生でしたが、どのような先生かお会いしたこともなく、水曜日の第1時限という辛い時間帯でしたが、講義内容に興味があったので、欠かさず出席しました。このころ私はすでに先生が京都大学大学院在学中に翻訳されていたギリシャ悲劇のあることを認識していましたし、それだけにこの講義にもいっそう引き付けられました。講義の内容は「古典ギリシャ文学」全般に関するものでした。10名前後の受講生がいましたが、ほぼ全員毎回出席していました。講義にはときどき先生がドイツ留学中にギリシャまで足を運び（これがまた車で行かれたそうで、とても楽しいドライブだったそうです）、撮影されたという写真まで映像で見せて頂き、古代ギリシャ

の舞台だの、クノッソスの迷宮だの、学生の間から先生にいろいろな質問がなされ、楽しい講義だったのが今でも思い出されます。こうしてこの年は終り、その後4年間先生とお会いすることはありませんでした（この間先生はマインツ大学へ客員教授として古典文学の講義に出張されていますし、これはその後も続きました）。

大学院在学中にひょんなことから岡先生に再びお会いすることになりました。先生は（事務所から）私の名前をお聞きになっても私が4年前の教養科目の受講生であったことなど、実際に再会するまではご存知なかったと思う。というのも、教養科目時、私は風呂敷包みに筆記用具やクラブ活動の道具を入れてよく持ち歩いていたので、再会してはじめて先生は私がその学生であることに気付かれたことでしょう。けだし再会後一度「あの風呂敷包みには何が入っていたのですか」と尋ねられたからです。何年も前の、しかも一学生のことをよく憶えておられたのには驚きました。

再会のきっかけは、当時同志社大学では院生に対し、指導教授のお手伝いをする事で、月額何がしかのお金が無償貸与される制度がありました。私だけ指導教授が決まりませんでした。専攻の関係上京都大学法学部から講義に来てくださっていた上山安敏先生にも資料等の相談にはのって頂きましたが、先生も多忙なため難しかったし、学外の先生のお手伝いをして貸与を受けるのもおかしい話なので、どうしていいかわからず、ほおって置いたところ、事務所から4月末に「岡先生にお会いして指示を受けて下さい」と連絡があり、こうして4年振りにお会いすることになりました。私に会って、先生は教養科目時の受講生であることに気付かれたのでしょうか。毎週水曜日に先生の研究室へ行くことになりました。ほとんど、何もしなくてよろしい、とのことで、お会いしてすぐ帰ることが何度ありましたが、5月に入って何週目かの水曜日に研究室を出て二人で歩いている途中で突然先生は「ラテン語を読みませんか」と声を掛けてこられました。私はびっくりするとともに、どうして私が古典語を勉強していることを先生がご存知なのか不思議に思いました。修論を書かねばならないと考えていただけに、即答はできず、少し考えさせて下さい、と生返事をしてしまいました。あとで、これでは先生との関係が気まずくなるのではと考える一方、これは本格的に勉強するにはよいチャンスかも知れないと思い、次週お会いしたときに「宜しくお願い致します」と返事させていただきました。その次の週、先生は「CiceroのDe legibusを読みましょう」とテキスト

を指定されました。そのテキストの入手方法も分からず、何回か分をコピーさせていただき、LoebのClassical Libraryを勧めて下さいました。但し英訳はもうひとつのこと。こうして毎週水曜日午後1時から先生の研究室で3時間ぶっ通しの読書となりました。夏休みに入っても先生の研究室へ出かけて行きました。始めは遅々として進まず数ページ訳すのがやっとのことでした。夏休みも終りに近づいた頃、先生は次回から私の家で読みましようと言われ、8月の最終週から先生の自宅が読書場となりました。私の方といえば、De legibusの第一文を読んだところで始めてラテン語のおもしろさ、すばらしさに触れて感激したのを今でも憶えています。なるほどラテン語とはこういう構造になっているのかとはじめて知った喜び、うれしさは何にも代えがたい貴重な体験として残っています。専門の先生方を前に何と他愛ないことをと思われるかも知れませんが、それまでラテン語のテキストの練習問題だのローマの法文 Lex しか読んでこなかった者にとっては、Ciceroの第一文は実に印象深いものとなりました。こうしてラテン語の読書は毎週欠かさず進みました。私も必死で読みました。3時間でわずか数ページというのではいつも申し訳がなくもっと沢山進まなければと思っていたからです。徐々に辞書を引く回数が減ってきました。De legibusの3分の2が済んだころには稀にしか辞書を引かなくなりました。

あとで振り返ると、先生もあの頃は私とのお付き合いで、随分多忙な中におられただけに、かなり無理をされていたのではないかと推測されます。De legibusの数ページが10月に入ると1回20数ページというペースになっていたからです。もう辞書不要の状態で読めました。先生はもちろん辞書など使われずもっぱら私の訳をじっと聞いておられました。いつの間にかDe republicaに入っていました。これは同志社大学法学部の先生方から翻訳を求められておられたものであり、先生も何とかはやく翻訳しなければと気にしておられました（これは後に先生が「法制史学会：於京都大学」で報告されました）。こうして先生とのお付き合いが6ヶ月に及んだ頃（その後もこの読書会は翌年2月まで続き、Senecaに入ったところで終わりました）、先生はまだ口外しないでほしいのですが、京都大学へ行くことになるかも知れないとこっそり語って下さいました。翌年京都大学へ変られました。岡先生との勉強会は後で先生も「あのときのラテン語の勉強は非常に役に立ちました」と仰ってくださり驚いていますし、こんなに勉強しない学生を相手によく我慢して下さいたことに感

謝しています。いまでも先生ほどの学者が私を相手にして下さったというだけで、驚いていますし、嬉しく光栄に誇りに思っています。格の解釈、訳語の問題、意味の不明瞭などいろいろな点でご教示くださったことなど今ではなつかしく思い出されます。

京都大学へ変られた後も資料のことなどで時々岡研究室を訪問させていただきました。その頃先生は研究室でラテン語でわからないことがありましたら「彼に尋ねてもいいですよ・・・」と同研究室の片隅で何やらゴソゴソされていた助手（私の推測ですが）らしき青年の方を差して仰いました。残念ながらその方とは直接お話しする機会を持てませんでした・・・・・。

岡先生には単にラテン語にとどまらずギリシャ語やドイツ語のことまで相談にのっていただきました。フランス語は言うに及ばずイタリア語、ロシア語とヨーロッパのほとんどの言語を勉強されていた先生のご努力には敬服いたします。

以上岡先生との思い出を先生の30代後半の頃の一時期ではありますが、私の記憶するままに、ほんとうは先生についてはもっと書きたいことがあるのですが、なつかしく又残念なことになったという思いを交えながら、短い文の中に綴らせて頂きました。

私以上に先生から学恩を受けられた方々が大勢おられます中で、僭越ながら思いのまま書かせていただきました。先生にはもっとご活躍して頂きたいと常日頃考えていただけに、突然の訃報に接し痛恨の極みです。これはもちろん私一人だけのことではないでしょう。

先生の生前のご功績をここに万感の思いを込めて賞賛したいと思います。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成12年8月